



校長通信

空の飛び方

卒業生の皆さんへ・・・「自立と共生」の心を持って

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんが、「好学時習」、「質実剛健」、「互敬友愛」の校訓のもと、たゆまぬ努力を続け、今日のおき日を迎えたことに敬意を表します。本日の卒業式の式辞の中で吉野弘さんの「生命（いのち）は」という詩を引用させていただきました。吉野さんの詩には、どれも大変わかりやすい言葉で、ものの見方一つで日常が変わるというメッセージが込められています。どの作品も胸が熱くなるものばかりですが、ここで、改めて「生命は」という詩を紹介します。



生命は、自分自身だけでは完結できないように つくられているらしい
 花も めしべやおしべが揃っているだけでは 不十分で
 虫や風が訪れて めしべとおしべを仲立ちする
 生命は その中に欠如を抱き
 それを他者から満たしてもらうのだ
 世界は多分 他者の総和
 しかし 互いに 欠如を満たすなどとは
 知りもせず 知らされもせず
 ばらまかれている者同士 無関心でいられる間柄
 ときに うとましく思うことさえも許されている間柄
 そのように 世界がゆるやかに構成されているのは なぜ
 花が咲いている すぐ近くまで
 虻（あぶ）の姿をした他者が 光をまとって飛んできている
 私も あるとき 誰かのための虻だったろう
 あなたも あるとき 私のための風だったかもしれない



この詩では花が実を結ぶために、虫や風など花以外のものの力を借りるように、すべての生命は自己を完結させるために、他者との関係を運命づけられていると言っています。人間も不完全であるがゆえに、自分ひとりでは生きられない存在であり、常に誰かの力を借りて生きているし、自分自身も周りの誰かの役にも立っている、そんな「共生・共存」のメッセージが込められています。別の見方をすれば、人間の弱さや不完全さは決してダメなものではなく、そういうものを感じているからこそ、そこに他者が入ってくれて、その隙間を埋めてくれるということです。一つの生命が自分だけで完結できるとうぬぼれないように、すべてのものに欠如を与え、その欠如の充足を他者にゆだねるという自然の摂理の妙がここにあるのです。

卒業生の皆さんが、これから向かう世界は大きな激変期にあり、これまでの価値観だけでは、とうてい解決できないような困難な問題に直面しています。こうした社会を生き抜くためには、自己のエゴを捨て、他者の立場に立って謙虚な姿勢で行動していくことが大切です。自分の思いを通すために相手を力づくで押さえるというやり方があるはいけないのです。また複雑で激動する社会に流されないためには、自ら考え、本質を見抜き、自分の意見をしっかり持ち、新しいことを創造して個を確立すること、すなわち、「自立」した個人として生き抜くことも大切といえます。皆さん、「自立と共生」の心を持って力強くこれからの人生を歩んでいってください。皆さんのご活躍を祈っています。